

成 果 報 告 書

【H30 年度教育改革推進事業経費】

所属部局	教養・協働教育部門	代表者氏名	中島 敦司
事項名	和歌山のことなら何でも知ってる和犬づくり		
当初計画に対する目標達成率	100 %	事業の終了時期	平成 31 年 3 月
予算配分総額	702,000 円	経費使用総額	301,946 円

【事業の成果】 ※具体的に記入してください。

本プロジェクトは、教育改革が目的であるため、1) 学生教育/研究と地域研究/学習の連動 (PBLや卒業研究) に焦点を当て、どのような仕組みを構築すれば、学生が自由に地域内を闊歩し、地域研究/学習をスムーズに実施できるかについて検討した。また、それを効率的に進めるため、2) 学外 (特に地域) との協働、を学生自らが行うことができるようになるための要件整理も並行して行った。具体的には、地域研究/学習に取り組んでいる学生に対して活動面での隘路に関する半構造化インタビュー調査を行うとともに、市民との協働の可能性についても聞き取った。その結果、1) 情報冊子の配布は地域研究/学習への誘いに対する効果はあるものの、補足説明をしないと大きな効果に至らず、2) 導入講座の開講による地域研究/学習への誘い効果が大いことを認めた。3) 地域を題材にした地域研究/学習の実施は学生の地域への愛着を高め、卒業後の進路にも影響する可能性が小さくないことも明らかとなった。その一方で、4) 市民との協働については、学生はあまり乗り気にならないことも指摘された。また、6) 地域研究/学習に対する隘路は、移動方法の支援に集約され、特に学生が運転する自家用車の使用をどのように制限、支援するかが最大の課題であった。

【当初計画段階との対比】 ※上記目標達成率を判断した理由等

当初は、北海道大学和歌山研究において導入実習を行い、その受講生を地域研究/学習に誘いながら、これら学生の行動観察とインタビューを行う計画であったが、災害のために北海道大学和歌山研究の使用が困難になり、秋期まで復旧を待たせたが復旧が終わらず、結果的に実施を断念した。このため、次の受講生を地域研究/学習に誘う計画以降のステップも実施できなかった。その結果、経費の半分以上を返納し、その上で、過去に導入実習を受講した学生、すでに地域研究/学習に参加している学生を対象とした行動観察とインタビュー調査に内容を変更したところ、計画していた「学生の生の声」を聞き取る当初目的は確保でき、結果として、教育プログラムの効果検証、隘路ともに明らかになることができた。このため、目標は100%達成できたと自己評価した。なお、これが実現できたのも、3年前まで導入実習 (熊野フィールド体験) を実施してきたからであり、閉講してしまった現在は、学生を地域に誘う有力な手段の一部を失ったことになっていることも明らかになった。

【今後の展望等】

○本事業の発展性

本事業では、学生を地域に誘うためには低学年時の導入実習が有効であることが明らかとなったため、現在は開講していない導入実習を再開することで、学生の興味と愛着を地域、あるいは地方大学である本学へと向けることができる。これは、本学の方針を支援する効果につながり、COEの目標達成にも貢献するものである。また、市民との協働の中で得た地域情報 Webデータベースを本学で本格運用することで、本学の保有する地域情報の量を格段に増強することができる。ぜひとも、全学的な取り組みへと発展させたい。

○改善すべき事項

本事業でターゲットにした、学生の地域研究/学習を活性化させるためには、1) 学術的な指導体制の強化、2) 移動の支援に集約された、特に、学生の自家用車での移動をどのように取り扱うかについてが最大の課題である。現在のように完全に排除する方向だけでは学生の地域研究/学習を活性化させることは非常に困難にするばかりか、大学が被る責任の問題から実態を無視しているだけに過ぎず、諸事から「学生を守る」という義務を放棄した状態になってしまっていることは改善しなければならない。安全教育の徹底と手厚い保険制度の導入により、学生の自家用車の運転を容認する方向で制度を整備する必要がある。これは、実情に合わせて制度を作っていく必要があるという意味でもある。

○大型の競争的資金等 (COE、GP等) への申請実績及び今後の予定

教育分野において大型予算があるのであるなら、是非とも挑戦したいが、今のところ適切な資金を見つけることはできていない。

○その他特筆すべき事項